

「スピリチュアリティ」とは？

最近、スピリチュアリティという言葉が新聞、雑誌でよく見かけます。しかし、「スピリチュアリティ」という語が何を意味しているか、戸惑うこともあります。

英語の辞書を引くと、精神、心、本質などが出てきます。では何故、精神や心と言わずにスピリチュアリティと敢えて言うのでしょうか。今日、「スピリチュアリティ」という語を敢えて使用する理由があるのでしょうか。スピリチュアリティが使われている出版物を見ると、通俗的なものから、学術的なものまであり、例えばカウンセリング関連の書物や医療関連書まで、スピリチュアリティ、スピリチュアルケア、スピリチュアル・ヒーリングなど、幅広い領域で使われています。

最近、『キリスト教のスピリチュアリティ』（新教出版社）という翻訳本が出版されました。扉を開くとキリスト教の歴史が年代を追って書かれ、その時代に発信されたキリスト教の本質的メッセージがまとめられています。ここではスピリチュアリティはキリスト教の「精神」などの意味で使用されています。

そして、ページをめくっていくと、そこには民族的スピリチュアリティや黒人のスピリチュアリティやゲイ/レズビアン人のスピリチュアリティまで、今まで耳にしたことのない言葉が書かれています。ここでの意味は、「アイデンティティ」（自己同一性）、つまり、「黒人らしさを表現するもの」あるいは「ゲイ/レズビアン人の人間らしさ」を表すことばとして用いられています。少し引用してみますと、「ゲイ/レズビアンたちの初期のスピリチュアリティの表現は己の信仰を窒息させながら秘密を隠して生きるつらさが中心にあった。やがて、自分の正直であることに伴う障害を乗り越えて自由で自分らしい新しい人生に向う旅が中心となっていった。」（386頁）と述べて、社会の偏見で苦しんだ人たちが自由に「自分らしい新しい人生」を発言できるようになったことをスピリチュアリティの獲得として扱っています。このような意味では、スピリチュアリティが精神、本質という語よりももっと生きるための生命力・勇気・希望などを含んで用いられています。この本の著者は敢えてそのような意味を込めて使用していると思えます。

わたしはスピリチュアリティを理解する際のキーワードは「癒し」「聖なるものとの関係」「人間らしさ・自分らしさ」の三つだと考えています。現代社会の問題をスピリチュアリティという観点から見るとスピリチュアリティの第1の特徴は「癒し」です。また、哲学や思想との対比で言えば、スピリチュアリティの第2の特徴は、「聖なるものとの関係」を持つところです。そして、心理学やカウンセリングとの関係で言えば、第3の特徴「人間らしさ・自分らしさ」の獲得といえます。

上に引用した「ゲイ/レズビアン」の例でのスピリチュアリティの使い方の一つは、私の理解では「自分らしさ」であると考えてよいと思えます。スピリチュアリティが示しているのは、その個人、文化、民族、歴史、集団、時代、芸術がもつ「そのものらしさ」の生命力や勇気を示していて、それは「そのものがもつ超越性や神秘的深さ」と繋がっていきます。超越的なものと繋がることから生命力や勇気が生まれてきます。そしてそこからその人らしいアイデンティティが生まれてくる訳です。

少し話が変わりますが、20世紀を代表する英国の陶芸家で日本人の母と英国人の父の間に生まれ、日本文化をよく理解して活動したバーナード・リーチ（1887-1979）の作品展を見る機会が最近ありました。リーチは日本や香港で幼い時期を過ごし、その後英国で学校教育を受けましたが、22歳の時、芸術家になる夢を抱いて日本にやって来ました。11年間の滞在中、日本では柳宗悦、濱田庄司、河井寛次郎、富本憲吉たちと交わり、日本の芸術家と深い関係をもちました。イギリスに帰国してからもしばしば日本を訪れては各地の窯場で製作しました。私はリーチの作品を一つ一つ見ながら、心の豊になる感動を覚えました。作品一つ一つが生活実感を漂わせ暖かみが伝わってきました。魚、木々、草などが自由な姿で絵付けされています。そして、陶器には、リーチが生きてきた国々の文化を感じさせるものが描かれています。英国のスピリチュアリティと日本のスピリチュアリティが慎ましくやかに表現されています。リーチの目に映った文化的スピリチュアリティが暖かく表現されているので、作品を眺めていると非常に心が優しくなるのを感じ、自分を取り戻すような感動を覚えました。一緒に見ていた人が「自分の故郷に出会っている感じ」と感想を口にしましたが、正に、人の心の底にある自分の故郷をリーチは表現していました。

『バーナード・リーチ日本絵日記』（講談社学術文庫）の中にリーチが次のように書いています。「日本人の工藝美への道は、大方は人生への仏教徒の対し方に由来する。（中略）人にとっても、その手の仕事にとっても、理想は『調和』で

あり、『自己』と『非自己』との間の、また人間の作品の美と自然の美との間の諧調である。それ故、私たちは、今は稀となったが、ルネッサンスや宗教改革や産業革命以前の西洋人には親しいものであった、さまざまな謙遜さや勤勉さのことに耳を傾けたのだ。」(23 頁)。ここにはリーチが見た日本の工芸美の姿が実に的確に凝縮されています。

リーチが見た工芸美は単に陶工の技術が優れているというのではないという。むしろ、人生と格闘し、何とか人生としっかりと向き合い人生をまともに生きようとする仏教徒たちの真剣で気迫がただようものだと言っています。その気迫は「自己」と「非自己」、「作品の美」と「自然の美」との諧調であると言います。この二つのもので成り立つバランスの美しさがあるのです。この創作には絶えざる努力と同時に打ち砕かれた自己という謙遜さが必要です。

リーチが語る日本の工芸美こそ日本人の魂に触れるスピリチュアリティの表現です。日本の工芸が追求して止まない究極の美だからこそ、日本人の魂に的確に触れ、それゆえに疲れた魂を癒す力をもつのです。